

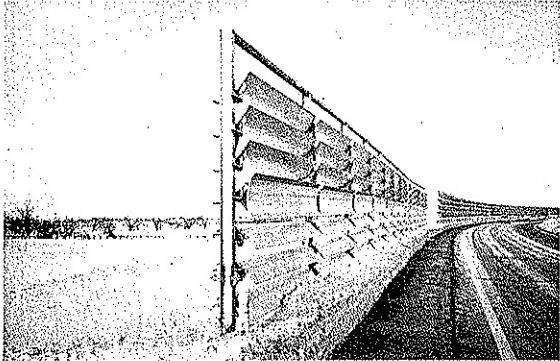
独立行政法人防災科学技術研究所と理研興業、佐藤建設工業が共同研究

上下分流高性能防雪柵実用化

理研興業が生産・販売を開始

防雪柵メーカーの理研興業(小樽、柴尾耕三社長)

は、独立行政法人防災科学技術研究所と佐藤建設工業(東京)の共同研究により開発され、実用化に当たって同社のノウハウを生かした『上下分流高性能防雪柵』の生産・販売を開始した。この新製品は、吹雪のエネルギーを最大限に活用。中央翼を中心に、飛雪粒子を上下方向に振り分け、確実にドライパールの視程を確保するもので、柵高の約六倍(従来柵の二・三倍)という飛躍的な効果領域を有するのが最大の特徴。これまで対策が困難とされてきた幅員の広い高規格道路に対応する画期的な製品で、早くも関係者の注目を集めている。



災害科学研究所長 岡雪水 防災研究所(佐藤篤司所長)とともに、共同研究を進めてきた。同研究所では佐藤建設工業と共同で平地、盛土などの設置条件下で最良の性能が得られるような基本構造を低温風洞での吹雪実験や、実物

採用することで、吹雪の風速を減速させることなく、飛雪板は、佐藤建設工業の嶋田潔氏が昭和六十一年に飛行機の翼理論からヒントを得て考案したもの。受風面に積りや抗力係数が小さく、空力的合理性に富む翼型をとを考へ、独立行政法人防災科学研究所長

この防雪柵に使用される速を減速させることなく、飛雪板は、佐藤建設工業の嶋田潔氏が昭和六十一年に飛行機の翼理論からヒントを得て考案したもの。受風に積りや抗力係数が小さく、空力的合理性に富む翼型をとを考へ、独立行政法人防災科学研究所長

製造化に当たって、防雪柵メーカーとして四十九年の歴史を持つ理研興業のノウハウを生かした同防雪柵は、ドライパールの視線高度に設置された中央翼で飛雪を上下に分け、上部翼群が

性能を実証している。製品化に当たって、防雪柵メーカーとして四十九年の歴史を持つ理研興業のノウハウを生かした同防雪柵は、ドライパールの視線高度に設置された中央翼で飛雪を上下に分け、上部翼群が

採用することで、吹雪の風速を減速させることなく、飛雪板は、佐藤建設工業の嶋田潔氏が昭和六十一年に飛行機の翼理論からヒントを得て考案したもの。受風に積りや抗力係数が小さく、空力的合理性に富む翼型をとを考へ、独立行政法人防災科学研究所長

性能を実証している。製品化に当たって、防雪柵メーカーとして四十九年の歴史を持つ理研興業のノウハウを生かした同防雪柵は、ドライパールの視線高度に設置された中央翼で飛雪を上下に分け、上部翼群が

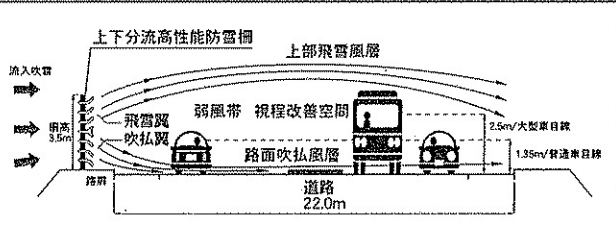
効果領域は柵高の約6倍

広幅員道路に対応

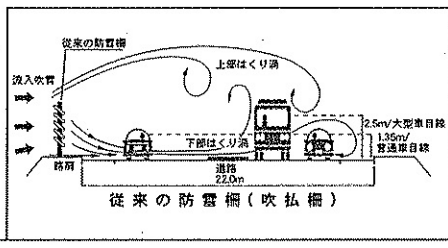
各種実験で高い性能実証

飛雪を上空・遠方に飛ばす一方、下部翼群には吹き払い機能を持たせた。これにより、柵高の約六倍(従来柵の二・三倍)の効果範囲を確保し、下図参照。従来、施工が困難であった高速度道路をはじめとした広幅員道路への対応を可能にした。無雪期には飛雪板を下部に折り畳んで収納することで、景観にも配慮しており、国土省の新技術情報提供システム(UNETI S)にも登録されている。理研興業は、従来の吹止式と吹払式の利点を併せ持った『誘導板付逆返し柵』や、カラマツ間伐材と鋼材を組み合わせた景観性能を追求した『木製高性能防雪柵』など、時代のニーズに応える製品を次々に開発。各地で着々と設置実績を伸ばしており、同社の柴尾社長は「冬季における道路交通の確保は本道の大きな課題で、特に、ライフラインとしての意味合いを持つ広幅員幹線道路の吹雪対

詳細問い合わせは、同社(小樽市銭函三丁目二六三番地七、電話〇一三四一六二一〇〇三三 FAX62一〇〇八八)まで。



上下分流高性能防雪柵



従来の防雪柵(吹払柵)



風洞実験の様子